

きのこ関連図書の紹介

吹春 俊光

会報を出すタイミングがずいぶんずれて、やや古い情報から新しい情報まで、20号に続き今回もまた、きのこ関連の図書を13冊紹介致します。きのこアドバイザーという団体の会報に掲載した記事に新規情報を追加しました。

「毒キノコが笑ってる」ーシロウトによるシロウトのための実録キノコ狩り入門

著者：天谷これ，出版社：(株)山と溪谷社，2003年9月20日発行，B6版，207頁，1365円(税込)，ISBN：4-635-23201-8.

国立科学博物館の菌類部門研究官であらせられる細矢剛さん大絶賛の本。著者をネットで検索したところ、「天谷(あまたに)さんは、宮城県仙台市出身、現在は東京でフリーのコピーライター&ドラマの企画などの仕事をしている女性でキノコ採り歴14年」ということであるが、著者名は「これ! Amanita」のことかな? 「きのこを採りたいのですが、どこへ行ったらよろしいのでしょうか」という疑問をお持ちの方、貴重な情報が満載されています。



「菌類の森」日本の森林／多様性の生物学シリーズ 2

著者：佐橋憲生，出版社：東海大学出版会，2004年5月20日発行，A5判，208頁，3150円(税込)，ISBN：4-486-01638-6.

硬いタイトルの本だが、表紙を見ていただきたい。本の内容も読みやすく面白そうである。著者は現在森林総合研究所の九州支所勤務であるが、東北支所時代の著者の独身の家を覗いた人の証言では「部屋の中は世界のどこよりも生物多様性が高かった」そうである。著者は、生態学会で長年「森の日陰者」シリーズと称して菌類に関する集会を主催してきた。話し出すととまらず、その内容は興味深い。本の内容もどうやらそんなふうである。



「松枯れは森の感染症」 森林微生物相互関係論ノート

著者：二井一禎，出版社：(株)文一総合出版，2003 年 11 月 8 日発行，A5 版，222 頁，2625 円(税込)，ISBN:4-8299-2183-8.

著者はマツ材線虫病の研究者。何故日本のマツは枯れていくのか。線虫とマツ枯れのとのかかわりあい、森林の中の生物間の相互作用をみつめて 20 年以上。その研究史をふりかえり将来を展望する。マツやマツ枯れに興味をおもちの方は必携・必読。

「ここまで来た！まつたけ栽培」

著者：吉村文彦，2004 年 9 月 7 日発行，B5 版，112 頁，4500 円（税込），送料 300 円。

岩手県岩泉市に設立された「正統派のマツタケ研究機関の役割を果たしてきた世界で一つの研究所」である岩泉まつたけ研究所の 15 年の成果が本となった。当時の内閣から配布されたふるさと創生資金で、金塊を買ったり温泉を掘ったりせず、岩泉市はマツタケの研究所をつくったのである。著者はこの研究所の初代所長である。戦中のナラタケとツチアケビの菌根研究などで、菌根研究では世界に先駆的な業績をあげた故浜田稔先生の直系のお弟子さんでもある。もちろん本書に盛り込まれた成果はこの浜田一派の戦後に積み上げてきたマツタケ研究がベースとなっているが、本研究所でのマツタケ山づくりに関する正攻法の研究内容と成果が披露されている。本研究所の独創であるマツタケの菌の感染に成功した簡易な「マツタケシート法」の紹介もある。そして単なるマツタケ山づくりのノウハウ書にとどまらず、マツタケをとおして里山を再生させるといふ、広い視野に立ったマツタケ山づくりが論じられている。巻尾の、京都大学農学部図書室の大月司書によるマツタケに関する文献目録も充実している。1900 年の草野俊助大先生の文献にはじまり約 100 年分の文献が網羅されている。とりあげられた文献は、有料で京大の農学部で複写が可能である、という説明がある。前書きには「マツタケ山をミクロとマクロの両視点で観察をし続け、マツタケが『して欲しい』と思う施業を行ってきた人物」と、小原弘之同志社女子大教授の的確な推薦が添えられている。全頁フルカラー。



一般の書店では購入できません。

問い合わせは下記まで。

(株)トロン

〒107-0061 東京都港区北青山

1-4-1 ランジェ 青山 808

電話：03-3408-1521

FAX：03-3408-1448

「見つけて楽しむ きのこワンダーランド」(森の休日 4)

著者：大作晃一・吹春俊光，出版社：(株)山と溪谷社，2004 年 9 月 20 日発行，A4 判，114 頁，1680 円（税込），ISBN：4-635-06324-0.

誰も紹介しないだろうから、私から自己紹介。この数年、白い背景をバックに図鑑用の写真を取り続けた大作さんの仕事の福産物としてうまれた本で、背景を白く切り取られたきのこは、実物大で紹介されており、すがすがしい姿をみせる。きのこってこんなに綺麗だった？ 誰もがそう思うにちがいない。伊沢風野外きのこ写真は、きのこ図鑑界に新風を吹き込み、日本のだれもが伊沢風にきのこ写真を撮るようになった。そして、それから 20 年、またさらに新しい作風の写真がきのこ界に登場した。本書は超優秀編集者の山田智子女士による編集で、斬新な切り口で、きのこを紹介しており、そのタイトルだけを拾い読みしても面白い。野外ではてんで役に立たないが、書斎で楽しむアウトドア好きの本。



「キノコ学への誘い」

編著：大賀祥治，出版社：海青社，2004 年 9 月 15 日発行，四六判，190 頁，1680 円（税込），ISBN：4-86099-207-5.

きのこ関連の研究者 11 名による最新きのこ研究事情。寺嶋芳江さんのバカマツタケの菌根関連の寄稿もある。きのこの育種、きのこのバイオテクノロジー、きのこ成分など、内容は盛りだくさん。なお、表紙の写真は背表紙込み。



「都会のキノコー身近な公園キノコウォッチングのすすめ」

著者：大舘一夫，出版社：八坂書房，2004 年 6 月 25 日発行，B6 判，240 頁，1890 円（税込），ISBN：4-89694-843-2.

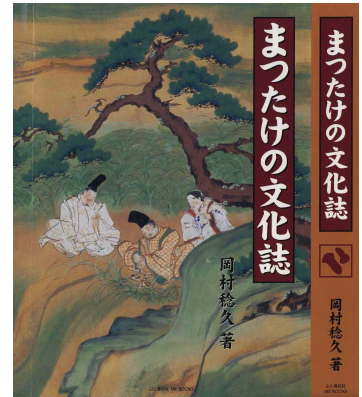
今年は首相官邸に毒きのこテングタケが生えていたといっているので、話題になった都会のきのこ。いったいそんなきのこには、どんな種類があるのか。また、どこからやってきたのか。テレビや新聞で報道した方々には、是非本書を一読してほしい。『きのこを通して都会を見る』という著書。



「まつたけの文化誌」

著者：岡村稔久、(株)山と溪谷社、2005年1月1日発行、四六判、341頁、2625円(税込)、ISBN：4-635-88592-5。

帯には「文献・史料でまつたけ狩り」とあるとおり、奈良時代から江戸時代を経て近現代までの、短歌、俳句、日記、本草書、料理書など、様々な史料をとりあげ、そのなかに登場するマツタケを蒐集し、日本人にとって特別の存在であったマツタケを論じた本である。様々な文献に登場するマツタケ関連の図譜が豊富に掲載されており、とても楽しめる。博物館の展示でも使いたい。江戸時代などの松茸狩りの図譜を見ていると、とてもうらやましい。松茸や人にとらるる鼻の先(去来)／茸狩のから手で帰る騒ぎかな(一茶)／茸焼くやそばにかけた酒のかん(空我)。日本人に生まれてよかった、と思う。なお、表紙の写真は背表紙込み。

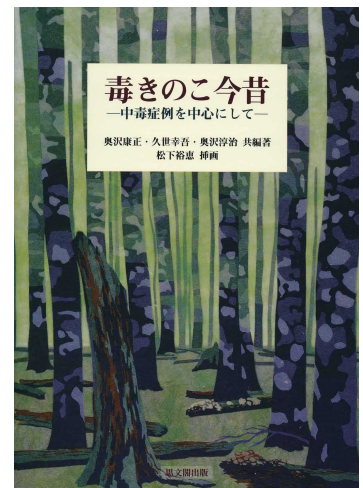


「毒きのこ今昔—中毒症例を中心に—」

編著：奥沢康正・久世幸吾・奥沢淳治、出版社：思文閣出版、2004年12月1日発行、B5版、366頁、4935円(税込)、ISBN：4-7842-1215-9。

きのこ毒については、故川村清一大先生による戦前から戦後にかけてつくられた全8巻の「原色日本菌類図鑑」が有名で、中毒症状の実例が非常に多く、また詳しくとりあげられており「世界に誇る図鑑である」とも言われてきた。本書でも約半分の分量がきのこ中毒の症例紹介にあてられており、古典となる情報から、聞いたこともないような文献まで網羅され、また最新の情報もふんだんに盛り込まれ、可能な限りの症例が蒐集されている。症例の前後には、毒きのこ前史として、平安時代からの日本の毒きのこの歴史が紹介されており、著者の本草書蒐集・研究家の面がよくあらわれている。また明治以降の近代医学のもとでの毒きのこ論争など、日本の毒きのこ研究の歴史も紹介されており、これまでのきのこ本にない医師としての視点からのアプローチもある。他にも様々な工夫が盛り込まれており、従来の日本の毒きのこ本になかった全く新機軸の著書ともなっている。今後のきのこ中毒に関する第一級のリファレンス書たる風格をもった著作といえるだろう。奥沢先生は、天保年間から続く京都の医家のご出身で、医師としての多数の著書他、きのこ関連の著作も多い。記憶に新しいところでは「きのこの語源・方言辞

典」(山と溪谷社)も大変な労作であった。博物学的な興味も旺盛で、京都市内に「眼科・外科歴史博物館」という私設博物館も開設されておられる。



「山菜&きのこ採り入門」(Outdoor Books 5)

著者：大作晃一，出版社：(株)山と溪谷社，2005年9月20日発行，A4判，126頁，1680円(税込)，ISBN：4-635-00755-3.

本会の会員であり、毎年のデジカメ講座の講師でもある大作さんの著書。本書も超優秀編集者の山田智子女史による編集で、著者に不慣れな山菜のテーマも、こなれた内容の紹介となっている。最初千葉で山菜の写真を撮りはじめて、山菜の時期がすすむにつれ新潟へと撮影旅行へでかけた著者は、新潟の山菜を見て「千葉の山菜は山菜じゃない」と言ったとか。本会員の友情出演の写真もあるのは、本書を見ての楽しみ。巻末には佐野書店の紹介頁もあり、いろいろに楽しめる。大作さん、これからもいろんな本を出してってください。山田さん、今後もよろしく。



「北陸のきのこ図鑑」

著者：池田良幸，監修：本郷次雄，出版社：橋本確文堂，2005年7月14日発行，B5変形，カラー図版146頁、テキスト394頁，15000円(税込)，ISBN：4-89379-092-7.

本書を紹介した佐野書店のHPには「著者が学校教諭さらには校長としての職務を全うしながら、50余年間、寝る間も寸暇をも惜しみ、調査と研究を続けてきた成果を集大成した図鑑 ～中略～ 掲載種数は今までに国内で出版された菌類図鑑類の中では一番多い1,403種(品種、変種を含む。以下同じ)、関連記載種を含めると1,526種に及ぶ」と紹介されている。佐野書店は、本書の出版に際し発行部数の数割を、買い取りの形で支援されたという。それくらい熱い心にさせる著書。評者に関心のある *Hebeloma* 属をみると、本郷図鑑は既知種5種が図入で紹介されているのに対し、池田図鑑は、既知種7種、未知種8種の合計15種が図入で掲載されている。そんな種類もあるのかと思うように、未知種に関しても顕微鏡の記載まで及ぶ記載は説得力がある。巻末の40頁以上にわたる付録には、きのこの生物地理の紹介、標本の作製・保管・整理方法の工夫、顕微鏡観察の方法、などが記述されており、読んでためになり、また著者がどのような工夫できのこ研究をおこなってこられたかがわかる。紹介しきれない程の工夫が随所に盛り込まれており、大変な労作であるのは間違いない。佐野書店に申し込めば手に入る。

北陸のきのこ図鑑



佐野書店へのアクセス

E-mail アドレス：

e_sano@d2.dion.ne.jp

ブログ：

<http://sanoshoten.blog13.fc2.com>

「エコソフィア 16 号 [特集] きのこが結ぶネットワーク」

菌根からみた世界／生態系維持のキーワード、菌根菌の底力を探る

発行：民族自然誌研究会，発売：昭和堂，2005 年 11 月 30 日，B5 判，1575 円（税込），ISBN：4-8122-0535-2.

これも誰も紹介しないだろうから、私から紹介。日本の菌根学は、かつて戦前・戦中、世界をリードする歴史をもっていたが、その後完全に世界のトレンドから立ち後れた日本。しかし、現在、20～30 歳代の若い方々が多数、日本各地で菌根学を推進している。生態学でも俄然注目される存在となった菌根。そんな事情を背景に企画された内容。高山栄画伯の菌類曼陀羅「三界図―循環する生態系」を冒頭に、「熱帯雨林を支える菌根ネットワーク」(菊地淳一／奈良教育大学)、「多様化する栽培きのこ」(山中勝次／元ホクト研究所)、「里山保全とマツタケ増産のとりくみ」(吉村文彦／元マツタケ研究所・津田格／岐阜県立森林文化アカデミー)「当世松茸事情」(上田耕司／京都錦やお屋かね松店主)など興味深いテーマと著者が並ぶ。続いて、こんな人達にコラムを頼んで失礼ではないか、と思わせるような大先生によるコラムが並ぶ。即ち、相良直彦、大和政秀、根田仁、浅井郁夫、阿部淳一、奥沢康正の大先生。そして、私も「菌類がはぐくむ森」として、菌根のことを今回勉強して菌根入門を書いていますので、是非読んでください。本シリーズは、京都大学の生態・

生物系の結構贅沢な陣容の編集委員が、智恵をしぼった自然をめぐる様々な話題をとりあげ、年 2 回発行されている。今回の号で 16 冊目となった。千葉では、国立歴史民俗博物館の売店でバックナンバーがそろえてあるので、興味のある方はそこで是非ご覧ください。



松茸の官製葉書発売される

平成 15 年 9 月 1 日、日本郵政公社信越支社から、絵入りはがき「香はがき（まつたけ）」が発売されました。もも・ぶどう・りんご・いちごに続く 5 弾で、発行部数は 3 万枚。額面は 50 円ですが、売価は 70 円とちょっと高め。絵柄には丁寧に透明フィルムが貼ってあり、上から



らこすってそおっとはがすと・・・ん～まつたけの香り、有効期限は約 10 ヶ月。なくなり次第次第終了とのこと。(吹春公子)



「菌類・細菌・ウイルスの多様性と系統」／

バイオディバーシティ・シリーズ4

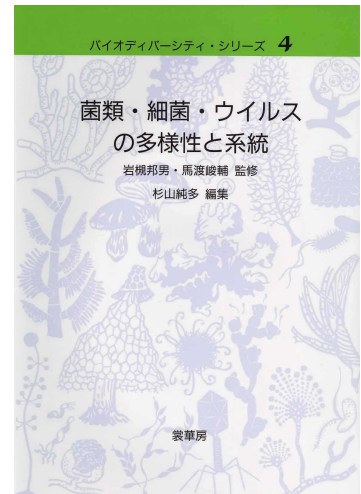
編著：杉山純多／監修：岩槻邦男・馬渡峻輔，出版社：裳華房，
2005年11月20日発行，A5判，492頁（＋図版8頁，目次など26頁），7140円（税込），ISBN4-7853-5827-0。

日本語で読める菌類を解説した本はとても少ない。また最新の分子系統学の研究成果を包括的に解説する本は皆無であった。本書は、日本語で書き下ろされた菌学概論であり、最新の分子系統学の成果をふんだんに盛り込んだものである。要するに唯一無二である。本書は5部に分かれている。1部は概論、2部と3部が菌類、4部が細菌、5部がウイルスをとりあつかっている。

まず1部では、従来微生物と総括してよばれた群、すなわちウイルス、細菌、菌類を一括して紹介し、細菌、古細菌などを視野に入れた真核生物、そして真核生物の中の真の菌類、と広い視野で新の菌のグループを見据えることができる。生物界の紹介も、ヘッケルの3界説、ホイッタカーの5界説、マルグリスの細胞内共生説、を紹介し、その上で分子系統学の成果が紹介されている。生物系統認識の歴史をたどった解説となっており、よい教科書といえる。

2部へはいると、菌類の多様性と系統が、様々な視点から8章に分けて論じられる。本書の核心部である。2章の菌類の起源を紹介した部分では、ゴイマンの説など、過去の主要な菌の系統に関する説をいくつも紹介し、近年の分子系統の結果と対比してあり懇切丁寧である。執筆者である世界的に有名な杉山純多先生の面目躍如たるものがある。3章は読み応えがある。「形態からみた多様性と系統」というタイトルのもとに、担子菌の隔壁構造と分子系統、子嚢孢子・子嚢・子嚢果の形態と分子系統、担子器の形態と分子系統、など、普通の著者には負担が重すぎ避けてとおりたい大テーマを正面から論じてある。担子器形態と分子系統の矛盾についてのコメントまである。分担執筆者の安藤勝彦さんは本物の菌学者である。

3部は菌類の分類群ごとの各論である。しかし丁寧で親切なのは、従来菌類とされていたが、最近は菌類の外に放り出された、アクラシス菌門や変形菌門などの分類群「偽菌類」が全て紹介されており、その最新の研究成果に基づく系統的



な位置づけを、本書1冊で読むことができる。親切である。

もちろん担子菌の所ではハラタケ類の分子系統学による成果が日本語で紹介されている。不完全菌のところでは、「不完全菌類に系統はあるか」などというタイトルで、現在の菌学における不完全菌類の認識を紹介しており、とても興味深い。ここも安藤勝彦さんの執筆である。ということで、多くの大先生が、最新の菌学の新知識をふんだんに紹介したつくりとなっている。ここまで読んで、7140円を高いと思った人は、わかってないね。